

とんだルリカケス

奄美市立手花部小学校

五年

浪辺 なみべ

虎太郎 こたろう

とある山奥の大きな木。そこにはルリカケスの巣がある。その巣には、ルリカケスの家族が住んでいる。家族の中で飛ぶことのできないルリカケスが一只いた。そのルリカケスはなぜ飛ぶことができないのか思い出してみた。思い出したのは、昔飛ぶ練習をせずに外で友達と遊んでばかりいたからだ。ルリカケスは、後悔した。「あの時練習しとけばよかったな。」

とぼそりとつぶやき、やつぱり空を自由に飛びたいと思い、飛ぶ練習をすることにした。まず他の鳥もやっているように高いところから羽をはばたかせ飛んでみた。だけど前にも進まず動くこともできず落ちこちてしまった。次に落ちる前にジャンプを試してみた。そのタイミングで羽を動かせばいいかと思ってみると少しういたが、二秒ほど経つとやつぱり落ちてしまった。しかも前に一センチも進まなかった。その後も何回も試してみても飛ぶことはちっともできなかった。

自分一人じゃだめだと思い、次の日、友達のアカヒゲに会いに行き、教えてもらうことにした。アカヒゲはだ

れよりも優しく、教え方が上手だからだ。アカヒゲに事情を話すと、こう言った。

「ルリカケスならすぐできるよ。コツはたったの三つさ。」

「たったの三つ。これまで何回も練習したのに。」

早く相談すればよかったとますます後悔した。そのコツの一つ目は「スピードをつけるときに素早く羽を上下に動かしスピードがついたら風を読みながら羽をしつかり広げること」二つ目は「上にあがる時は上のところを見て大きくはばたくこと」三つ目は「とにかく勇気を出してとぶイメージをもつこと」コツは分かったが、なかなか飛ぶことができない。アカヒゲは困った顔をしてこう言った。

「ルリカケス、高いところに上がっても下を見てはだめだ。こわいと思うと羽の動きが悪くなって絶対跳べないよ。」

分かってはいてもルリカケスは落ちたことを思い出してしまい、足がふるえてしまう。

学校が終わると毎日のように練習を重ねるが、なかなか飛ぶことができず、一か月がすぎたころ、三太郎とうげにクラスの仲良し四人組でハイキングに行くことになった。天気が良くみんなも笑顔で山を登り始めた。まさかこの後とんでもないことが起こることはだれも知

らずに。山を登っていると、だんだん雲がまわりをおお
い始めた。

「さっきまであんなに晴れていたのに。」
とクロウサギ。

「だいじょうぶだよ、父ちゃんが今日はずっと晴れだつ
て言ってたもん。」

とシオマネキ。

「雨が降ってきたらすぐ帰ろうか。」

とアカヒゲが言った。

「ところで、このかんばん何だろう。」

ルリカケスが指を指したが、だれもまだ文字が読めない
ためよく分からなかった。それは落石注意のかんばんだ
った。

「なんか石がかいてあるけど、まあいっか。」

みんなはぐんぐん進んでいった。

半分くらいまで登ると、海も見渡せてとてもきれいだつ
た。ここでお昼を取ることにした。あまりにも気持ちよ
く近くのどうくつに入り、みんなは昼ねをしてしまった。
しばらくすると、大きな声が聞こえてきた。クロウサギ
だった。

「雨がふってきている。」

風も出てきた。空はおこったようにかみなりを鳴らして
きた。

「うそだろ、雨に気を付けながら下ろう。」

とシオマネキ。みんなで下っていたその時、大きなかみ
なりが三太郎とうげに落ちた。すごいしんどうが起きた。
ズズズズ、何か変な音が聞こえてきた。

「なんかこの音だんだん近づいていない。」

「まさか。」

後ろを振り向いたその時。大きな石がころがってきた。
逃げるがどんどん迫ってくる。アカヒゲが横にいたクロ
ウサギをつかみ、大きくはばいた。そして、言った。

「ルリカケス、シオマネキといっしょに飛ぶしかない。」

ルリカケスはこれまでのことを思い出しながら羽を動
かした。今ぼくが飛べないとだめだ。そう思い必死に羽
を広げた。何とか飛ぶことができたのだ。

「よくやった、ルリカケス。」

どうにか大きな石を回ひすることができ、下山すること
ができた。

みんなのおかげで勇気を出すことができた。そして、
このことがきっかけでルリカケスは飛ぶことができる
ようになった。ルリカケスは空を見上げ、なみだを流し
た。みんながいるからぼくも成長できるんだ。